

和束町史編さん事業
資料調査報告書
第2号



令和4年3月
相楽東部広域連合教育委員会

ごあいさつ

和束町民の皆様をはじめ、町史関係者の皆様には、日ごろから、和束町史編さん事業の推進にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。

町史の編さんは、地域社会における「人づくり」の一環であり、町史編さん事業が町おこしとなって、和束町の活性化につながることに期待の高まるところです。

和束町では、平成27年（2015）12月に和束町史編さん室を設置し、以後、文化財等の現地調査、歴史資料の収集と調査整理・保管に努めるとともに、講演会・古文書講座・自然観察会・展示会等の開催、「学ぼう和束の歴史」事業の実施、『和豆香だより』の発行、ホームページへの掲載等々、事業の成果を広くお知らせすることにも積極的に取り組んでまいりました。

さらに、令和元年度からは、編さん事業の具体的な内容について紹介する『資料調査報告書』の刊行を始めました。第2号となる本号では、編集委員の先生方より、これまでの資料調査の状況につきましてご報告をいただきました。ご熟読いただき、和束の歴史についての理解を一層深めていただければ、ありがたい限りです。

この間、調査にご協力いただきました各区長様をはじめ、ご所蔵の資料を提供いただきました皆様に、厚くお礼申し上げます。引き続き、より一層のご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げ、第2号発刊に当たりましてのごあいさつとさせていただきます。

令和4年（2022）3月

和束町史編さん委員会

委員長 西 本 吉 生

目 次

ごあいさつ	1
1 和束町の埴輪	2～3
2 和束の古代史史料調査概況	4～5
3 中世史料の調査について	6～7
4 近世和束における木津川舟運と信楽街道	8～9
5 近代史料の調査からわかったこと—学校史料と戦争関係史料	10～11
6 和束町の歴史的建造物	12～13
7 和束の仏教美術調査報告	14～15
8 焙炉と製茶場と茶撰り箱	16～17
9 和束町の古地図史料	18
10 古地図史料紹介	19
11 調査した古文書一覧	20

表紙写真 大杉古墳出土人物埴輪

* 『資料調査報告書』第1号は、和束町史編さん室のホームページからダウンロードできます。（<https://www.union.sourakutoubu.lg.jp>）

1 和束町の埴輪^{はにわ}

諫早直人・菱田哲郎

京都府立大学文学部考古学研究室では、和束町史編さん事業の一環で、和束町内の古墳および出土品の調査を継続しておこなっています。一昨年度の本報告書では福塚古墳（和束町園）の測量調査の成果についてご紹介しました。今回は、測量調査の際に埴輪片についてご紹介したいと思います。

採集したのは写真1に示した11点の小さな破片です。泥まみれの破片を丁寧に洗って、観察してみると9点が円筒埴輪（写真1の1・4～11）、2点が形象埴輪（写真1の2・3）でした。モノクロ写真なので伝わりにくいですがオレンジ色をしています。一見すると植木鉢の破片のように見えるかもしれません、突帶（4や9の中央に見える横方向の太い帯）やハケメ（縦方向の細かな線）、スカシ孔（4の右下に丸くあけられた孔が1／4ほど残っています）といった埴輪にみられる様々な特徴が認められます。2は蓋形埴輪という形象埴輪の立飾部の破片ですが、埴輪の専門家にならないとなかなかわからないかもしれません。これらは墳丘裾や墳丘斜面だけでなく、墳頂部からも採集されていますので、もともとは墳頂部に立てられていたようです。

これまで福塚古墳から埴輪が採集されたという情報はなかったので、今回の採集資料によって、福塚古墳が円筒埴輪や形象埴輪を樹立する立派な古墳であったことが初めてわかりました。また福塚古墳の年代については諸説ありましたが、古墳の時期を知るモノサシの代表選手である埴輪が出土したことにより、福塚古墳の年代を詳しく議論することができとなりました。具体的にはこれらはいずれも密閉構造の窯で焼かれた特徴が認められることから、少なくとも須恵器を焼くような窯が日本に伝わった5世紀以降の埴輪ということになります。古墳時代の埴輪に詳しい奈良文化財研究所の廣瀬覚さんによれば、形態的特徴から6世紀前半にまで絞り込むことができ、また同じ京都府南部の埴輪よりも、奈良県北部の埴輪の影響を受けていた可能性が想定できるようです。

福塚古墳は墳丘がほぼ完存する和束町内では数少ない古墳です。和束天満宮の目の前にありますので、町内にお住まいであれば名前は知らないても（古墳とは気付かなくても）、

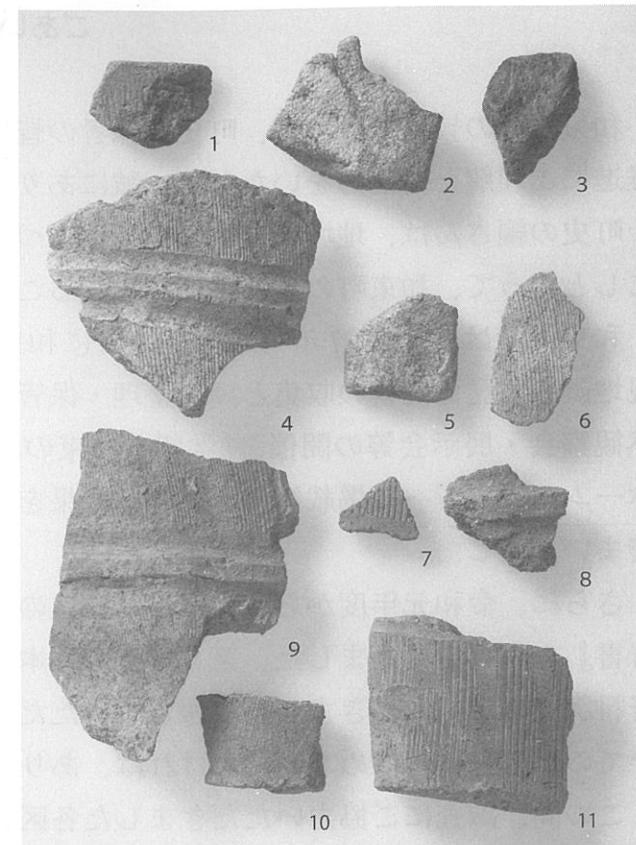


写真1 福塚古墳の埴輪（菱田哲郎撮影）

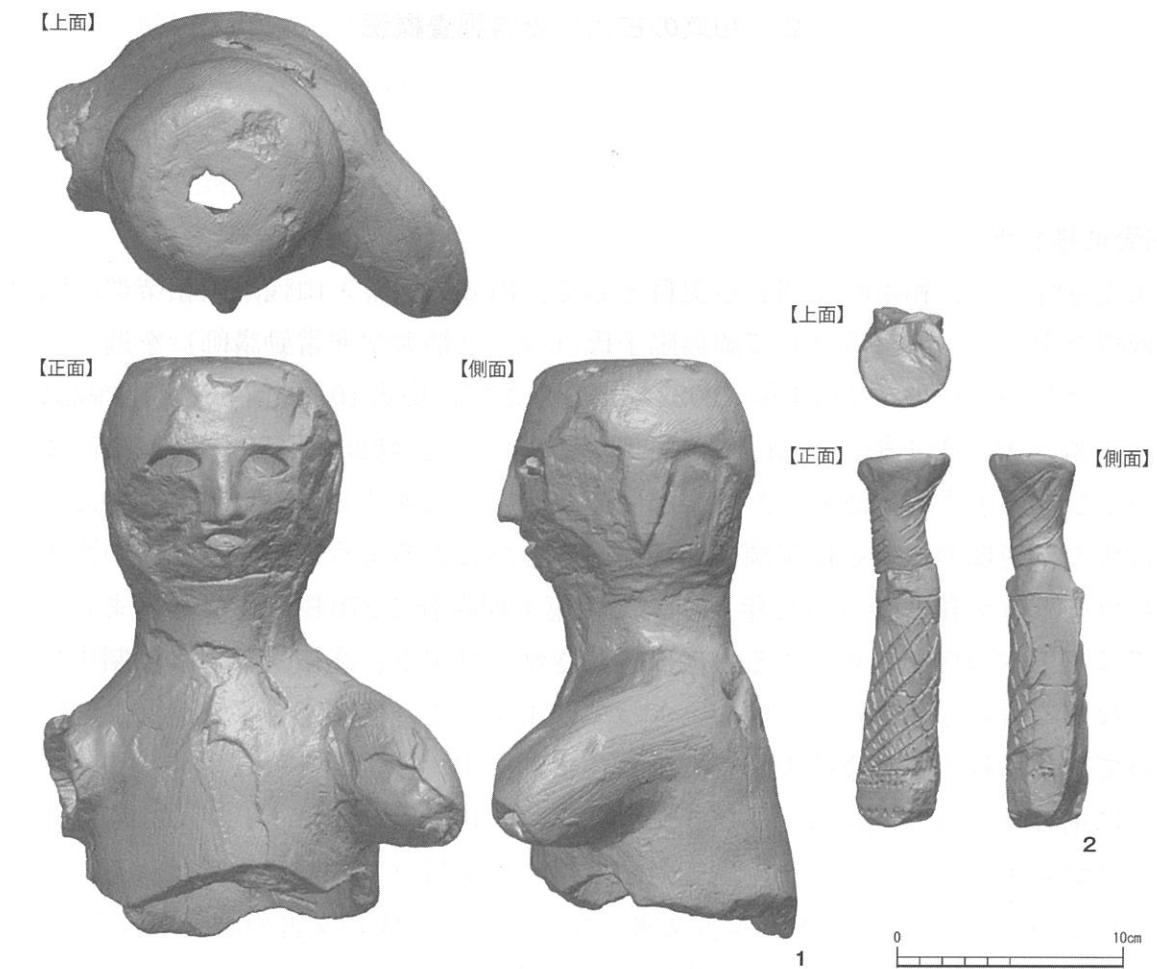


図1 大杉古墳出土人物埴輪3Dモデル（初村武寛氏作成）

必ず目にしたことがあるはずです。近くをお通りの際は、埴輪が立て並べられた福塚古墳の往時の姿を思い浮かべていただければと思います。

ところで、和束町内から埴輪がみつかったのは福塚古墳が最初ではありません。和束川の対岸にかつてあった大杉古墳（和束町中）からも立派な人物埴輪が出土しています。昭和58年（1983年）の住宅建設の際に出土したもので、古墳の詳細は不明ですが福塚古墳同様、まぎれもなく古墳時代の埴輪です。1は人物埴輪本体です。側面をみると美豆良らしき表現があることから、男子像であることがわかります。2はこの人物埴輪がもっていたとみられる大刀で、木製の刀装具を表していると考えられています。長らく個人のお宅で大切に保管してきたこの埴輪を本事業の一環でお借りして、現在、調査をおこなっています。図1は本学共同研究員で、元興寺文化財研究所の初村武寛さんによって作成された3Dモデルです。埴輪自体の評価については現在、検討を進めているところですが、正確な形状を三次元計測によって記録しましたのでまずはその成果を皆さんにお披露目いたしました。地道な基礎調査によって和束町の古代の様子が少しづつ明らかになってきています。今後の成果にもご期待ください。※ 古代の男性の髪型

2 和束の古代史史料調査概況

本庄総子

1. 調査進捗状況

古代史分野では、和束町に関わる史料として、山城（山背・山代）国相楽郡の関連史料を悉皆調査中です。調査員として岡島陽子氏（現・京都大学非常勤講師）を迎えて、調査を進めていただいた結果、令和4年（2022年）2月までに史書10編、寺伝1編、説話集1編、氏族誌1編、古辞書1編、法制書3編、歌集1編、古記録26編、近代編纂史料3編の調査が完了しています。確認された相楽郡関連史料は、A4サイズの史料カードに綴じ込まれ、古代の相楽郡の史料を編年順で一覧することができるよう整理されています。

史料カードは令和3年（2021年）度までの第1期調査で270枚が作成されました。内訳としては、①六国史を始めとする古代に編纂された歴史書、②格式などの法制史料、③万葉集、などの著名な基礎資料が中心となっています。その他、④『平安遺文』という近代になって編纂された文書集成の調査成果も含まれます。

さらに第2期調査の成果は、約300枚の史料カードとして令和4年（2022年）4月頃までに整理が完了する見込みです。調査対象となった史料は、古記録と呼ばれる平安時代の貴族の日記が中心ですが、『大日本古文書』など、奈良時代の文書の調査も含まれており、恭仁京遷都前後の相楽郡関連史料が集中して確認されています。

2. 調査方針

和束町の古代史史料を悉皆調査するにあたり、相楽郡まで範囲を広げたのは、自治体史における史料調査の通例にならったものです。古代の行政区分は基本的に国-郡-サト（靈龜3年（717年）までは「里」、以降は「郷」と表記）の3段階区分で編成されています。ある地域が古代のどの郡に属していたのか特定することは比較的たやすく、和束町の場合であれば、山城国相楽郡に属していたとみて良い訳ですが、どのサトに属していたのか特定することは一般的に困難であることが多いのです。それは、サトという行政区分の特殊な性質に起因します。

8世紀に成立した大宝令や養老令の「戸令」という篇目には、「凡そ戸は、五十戸を以て里とせよ」と定められています。戸とは、一定の地縁・血縁グループとして行政の便宜上編成された、一種の「世帯」です。つまり、サトとは50「世帯」に属する人々の集合として観念されている訳で、領域として明確な境界で線引きできるような区分ではありません。

従って、「古代の和束町の領域はどのサトに属していたのか」という問い合わせそもそも成り立たず、あえて問い合わせを立てるなら、「古代の和束に住んでいた人々はどのサトに属して

いたのか」を解明しなければならないということになります。

『和名類聚抄』という古代の辞書によると、相楽郡には「相楽・水泉・賀茂・大狛・蟹幡・祝園・下狛」という7つのサト（郷）が置かれていたことが分かっていますが、8世紀には他にも恭仁郷（久仁里）というサトがあったことが確認できます（『続日本紀』和銅元年（708年）9月庚辰条、同天平12年（740年）12月戊午条）。和束の谷はいわゆる「恭仁京東北道」（『続日本紀』天平14年（742年）2月庚辰条）によって恭仁宮の置かれた平地部と緊密に繋がり合う場所に位置しているので、和束の谷に集落が広がっていれば、恭仁郷に属していた可能性が高そうです。

ただし、相楽郡という地域は山城国の最南端に位置する郡であり、南は大和国、東は伊賀国、そして北東は近江国に接する複雑な地勢に位置していました。和束の地域もまさにその要衝に当たっていた訳で、恭仁郷という狭い範囲の調査をしただけでは和束のもつ豊かなイメージは浮かび上がってはきません。むしろ、今後は相楽郡の範囲を超えた交通の在り方にも注意して調査を進めていく必要があるだろうと考えています。

3 中世史料の調査について

横内裕人

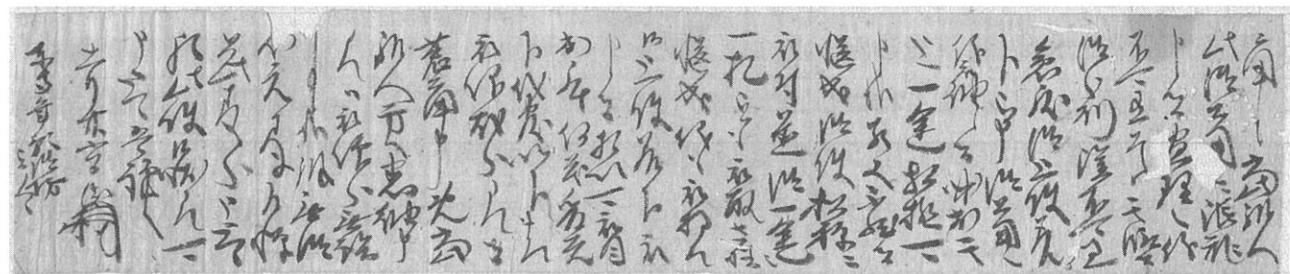
中世史料の調査状況についてお伝えします。和束に関する中世史料は、みなさんもご存じの文永4年（1267年）銘地蔵菩薩立像（撰原峠）・正安2年（1300年）銘弥勒立像（白栖）・同年銘宝篋印塔（鷺峰山山頂）などの紀年銘のある石造物が現地に残されています。ただ残念ながら、現地には中世に遡る古文書はほとんど確認されていません。そのため和束の中世史は他の地域に残されている史料から探る必要があります。

私たちは、これまでに書籍として刊行されている古文書・日記・記録などから和束の関連史料の集成を続け、『京都府立大学文化遺産叢書 第9集』（京都府立大学文学部歴史学科、2015年）に概要をまとめました。現在は、その脱漏を補うために、様々な史料群を紐解き、あらたに確認できた史料の補遺につとめています。

見落としていた史料のうち、時代順にいくつかを紹介します。いずれも断片的な史料ですが、古いところでは、12世紀の関白藤原忠実の談話を伝える『中外抄』に、興福寺僧千覚と延暦寺僧忠玄が「鷺峰山寺」の領有をめぐって争っていたことが記されます。現在、真言宗醍醐派に属する鷺峰山金胎寺ですが、平安時代院政期には興福寺と延暦寺の影響下にあったことが知られ、南北をつなぐ交通の要路にあった和束の拠点寺院が、南都北嶺両方からの影響を受けていたことが知られます。

また鎌倉時代末期の著名な絵巻『石山寺縁起』卷六があります。源頼朝を支えた「鎌倉殿の十三人」の1人として活躍する中原親能が、建久年間（1190～99年）に和束の城に籠もる謀叛の輩を討ち果たす一節です。源平合戦の余韻覚めやらぬころの騒動の可能性もあります。「城」があったとの記述も興味深く、鎌倉後期の和束では「和束城」に立て籠もった「栄兵衛尉」が興福寺衆徒・春日社神人と合戦をしていますが（『中臣祐賢記』）、こうした世相を反映した記述なのかもしれません。

さて先だって、和束町史編さん室専門員の田中淳一郎さんから、和束天満宮（国重要文化財）の棟札の写があることを教えていただきました。残念ながら棟札の現物は現在行方が確認できないそうですが、南北朝期貞和4年（1348年）の銘文が残る中世史料です。大工以下の人名や下司・公文・宮司・権神主・造営奉行らの名前も残る貴重な史料です。南北朝期の史料は、他の古文書などが残っていないため、大変重要な史料といえます。天満宮といえば、北野天神さんですが、寛正6年（1465年）に作成された北野社領松梅院の「不知行」目録に「一色右馬頭殿御寄進」になる和束庄が永享年中（1429～41年）から一色右馬頭殿（持範）が知行していると記されています（『北野社家日記第七』）。現在知られる史料で判明する北野社との関係は室町時代以降のものですが、さらに遡る史料が見つかる可能性もあります。京都の北野社との関係究明が期待されるところです。



曾歩曾歩清繁書状（東寺百合文書、セ函87号、東寺百合文書WEBより転載）



金胎寺石造香炉台

また近年世界記憶遺産に登録された国宝東寺百合文書のなかにも、和束に関する文書が複数ありました。16世紀前半のものと思われる曾歩曾歩清繁書状に「和束・喜多」なる語が見えます（セ函87号、テ函206号）。大和国平群郡の平野殿庄の庄官曾歩曾歩氏の書状になぜ和束の語が見えるのか、詳細の分析はこれからになりますが、まだまだ和束の史料が見つかることかもしれません。

さて、現地では中世史料を見つけることは困難ですが、近世の石造物で未調査のものはまだまだ残っているようです。昨年、鷺峰山金胎寺の仏像調査に同行して、寺内に残る木札や石造物などを調査しました。金胎寺では、写真のように、文政4年（1821年）の銘をもつ石造香炉台が残っていました。奉納した願主は、「肥後国天草住神樂島之助」と彫られています。現在の長崎県長崎市神樂島と思われる遠方の者が、どんな縁で鷺峰山に大きな石造物を寄進したのでしょうか。謎が残りますが、近世班とも情報交換して解明につとめたいと思います。

4 近世和束における木津川舟運と信楽街道

藤本仁文

編さん室が行ってきた古文書調査・目録作成・写真撮影により、今まで知られていなかった町域の基本的な古文書が閲覧できるようになったため、令和3年度はこれらの史料群の読み込みを本格的に開始しました。今年度は、特に近世和束の交通・流通・産業を中心に調査・史料読解を行いました。

木津川舟運については、和束山で伐り出された用材が木津川を経て陸路で南都大寺院に送られるなど、和束郷木屋浜は奈良時代から栄えた木津川の河港であったことが広く知られています。特に『和束町史』の中でも、「近世の木津川舟運は、領域の物資を大阪・京都へ輸送する重要な水上ルートとなり盛んに利用されている。そこで、和束郷に産する柿・干柿・わさび・甘藷・茶のほか、木柴・木炭などの大量の農林産物が、木屋浜や瓶原浜から淀舟に積みこまれて大阪・京都へと出荷されるようになってくる」(『和束町史』第1巻48頁)と記述されており、和束の歴史にとって非常に重要な役割を果たしていたことが分かります。

この木津川舟運については古文書が沢山残っており、例えば「山城相楽郡和束郷之内木屋村より木津川筋上下船先規五艘御座候内、壱艘者木屋川向井加茂へ之渡舟、四艘者大坂御城御荘松和束郷為御役儀先年毎年大坂積届」(「岡田家文書」7-132、慶安5年(1652年))とあるように、木屋浜に五艘の舟があり、うち四艘が大坂との往復をする舟で、大坂城の松を納める役儀にも深く関わっていたことが分かります。また寛政3年(1791年)に「木屋村御役舟預り 間屋重三郎」が先役嘉兵衛の退任を受けて後任として役儀を務めることになったため、「和束郷 御役人中」に出した「一札」も残されています(「岡田家文書」6-103)。木屋村の詳しい社会構造まで含めた分析が必要となっています。

また和束川については、「和束郷湯舟村伐出し候薪、和束川筋之瓶原井平尾村浜迄川下致し度、尤冥加銀可差上間、三ヶ年之間川下御免被下候様相願候ニ付」(「岡田家文書」7-93、天明6年(1786年))、「城州相楽郡和束川筋湯舟村より瓶原郷井平尾村迄道法三里程之間、高瀬舟三拾艘通船之儀相願候ニ付」(「岡田家文書」7-91、寛政6年(1794年))などの古文書が残されており、18世紀後半頃より高瀬船を往来させる計画が持ち上がっていました。

この和束川の通船計画については、信楽街道の物流量の増大が背景にあるものと推測できます。すなわち原山村に残る古文書には、「其郷内焼出被成候壺類瀬戸物荷物之儀当郷内通行刻、原山村ニ而荷繼場いたし、夫井平尾浜へ運送被致候処」(「岡田家文書」6-103、寛政5年(1793年))、「当村馬持共之内私共兩人江州信楽より瓶原郷井平尾村浜江指出候瀬戸物荷多附送」(「岡田家文書」7-247、午年)とあるように、原山村に馬持た

ちがいて、信楽から運ばれてくる瀬戸物などの荷緒をする中継地点の役割を果たしていましたことが分かります。加えて18世紀後半頃より瀬戸物の流通量が増大していることが読み取れます。交通・流通の構造などが近世の中でも大きく変容しつつあるものと推測できます。なお原山村は山間地帯であるため、稲作は難しく、馬持の他、石灰焼など多種多様な生業が行われていたことを示す古文書も残されています。

今年度は交通・流通に主に焦点を当てて史料読解を行ってきましたが、上記で述べた通り、和束の外の大坂・京都・奈良・滋賀との関わり、和束内の交通の要衝地域とその役割、和束各地の産業構造などが新たに視界に入ってきた。今回の編纂事業で新たに発見・調査された古文書によって、今まで分からなかった和束の具体的な様子が分かり始めています。次年度は、今回少し触れた産業の他、村人による山の利用について詳しく見ていくたいと思います。

5 近代史料の調査からわかったこと—学校史料と戦争関係史料

小林啓治

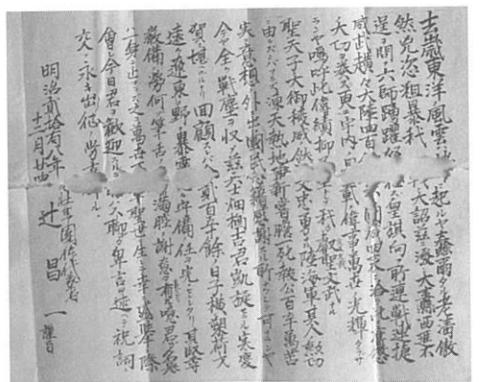
和東町の近代（明治維新以降）の史料は他の地域と比べて多いとは言えません。一番頼りになるのは明治期以降の村が作成した公文書ですが、それが非常に少ないからです。明治22年（1889年）の町村制施行によって、現在の和東町域は江戸時代の村をいくつかまとめて東和東村、中和東村、西和東村、湯船村に編成されました。本来なら、この単位で公文書が保存されているはずなのですが、水害や合併など、いくつかの理由で公文書が失われています。

これまでの調査では、個人や団体、区単位で保存されている近代以降の史料がどれだけあるかを把握し、公文書にかわって各村の様相がわかる史料をピックアップしてきました。ここでは、そのいくつかを紹介します。まず、公文書に次いで客観的に村のことを教えてくれるのは、小学校の沿革史などです。たとえば、東和東尋常高等小学校『学校一班』（昭和13年（1938年））は江戸時代の和東郷が明治維新を経てどのように編成されたかを記しており、『東和東校沿革史』（大正2年（1913年））には、明治初期以降の和東全体の小学校についての記述があります。また、『湯船小学校創立百周年に寄せて』（昭和49年（1974年））からは、回顧録を通じて日露戦争時の学校の様子を知ることができます。

戦前の村にとって一番大きな財政負担となっていたのは、村が責任をもって運営する小学校でした。村民が集まって実施される行事の多くは、一般的に小学校の講堂で行われたので、小学校の史料から村で何が行われたかがよくわかるのです。

さて、次に取り上げたいのは、戦争に関わる史料です。もちろん、戦前を戦争だけで語るのは適切ではありません。とはいえ、帝国日本が統治したすべての地域にわたって、団体や個人の経験から戦争の記憶・痕跡を消去することはできません。現在まだ調査中の部分が多いのですが、いくつか紹介しておきましょう。

一つは、日清戦争時のものです。「辻家文書」の中に、日清戦争に召集されていた畠檜吉氏の帰還に関する文書があります（右写真）。この文書は、明治28年（1895年）12月24日付で、□（一字判読不明）壮年団体代表者・辻昌一氏が作成したものであり、遼東半島で守備にあたっていた畠檜吉氏の労をねぎらい謝意を表しています。「辻家文書」には、このほかに森脇末次郎氏が招集された時の文書も残されています。



二つ目は、日露戦争時のものです。同じく「辻家文書」の中に、明治37年（1904年）8月18日付で、日露戦争の連戦連勝の祝賀会を催したいので趣向を立ててほしい、といつ

た内容の史料があります。しかし、皮肉なことに、その数か月前の5月末には、西和東村で戦死者が出ています。陸軍歩兵の杉田留造氏が、「南山の戦い」で戦死されたことに対する弔辞が残されていることから、そのことがわかります。日露戦争では、日清戦争とは桁違いの死者が出ていますから、他の村でも戦死者があったと思われますが、まだその人数を確定できていません。各区で把握されていましたら、お知らせいただけすると助かります。それにしても、もし実際に祝賀会が行われたとすれば、杉田氏のご家族は祝賀会をどのような気持ちで迎えられたのでしょうか。

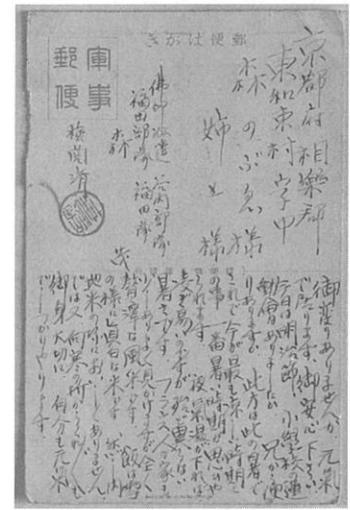
時代は飛びますが昭和12年（1937年）に始まる日中戦争、昭和16年（1941年）からのアジア・太平洋戦争^{*}では、貴重な個人の記録も発見できました。当時東和東村の森茂氏が残された日記や手紙・アルバムなどを借りし、撮影させていただくことができました。森茂氏は、大正11年（1922年）にお生まれになり、京都府木津農学校を出て京都師範学校に進まれ、そのあと、おそらく少年飛行兵に志願して昭和13年（1938年）に東京陸軍航空学校で訓練を受けられています。翌年には水戸陸軍飛行学校で訓練を受け、昭和15年（1940年）に満洲に航空兵として派遣されました。その後、昭和16年（1941年）に仏印（フランス領インドシナ＝現ベトナム）、満洲と転戦し、昭和18年（1943年）にはフィリピンに派遣されています。

森茂氏の史料からは、どのような思いで航空兵となったのかが見えてきます。大きな影響を与えたのは、中桶武夫『軍神杉本五郎中佐』という一冊の本でした。この本の表紙を開いたところに、「小生の思想精神を知りたまへ此の書を心より読み被下度」と書いた紙が貼り付けられています。

また、陸軍航空学校時代の『日誌』も残されており、毎日の訓練や生活が克明に記されています。ご家族にあてた葉書・手紙（右写真）は170通近くにのぼり、家族一人ひとりへの思い、戦地での自身の生活などが、検閲の範囲内ですが詳しくきれいな字で描かれています。ただ大変痛ましいことに、森茂氏は昭和19年（1944年）9月以降音信が途絶え、翌年6月30日に戦死されました。フィリピンに派遣された多くの兵士たちがたどった運命を免れることはできませんでした。手紙や『日誌』については、今後、一つひとつ丁寧に分析していきます。

おそらくこうした体験をされたご家族は、たくさんあると思います。国家が始めた戦争で犠牲になった方たちの体験ですから、個人の私的な体験にとどめるのではなく、ご遺族の許可をえた上で、公的な記録にとどめておくことが大切だと考えます。戦後の南山城水害の体験も含めて、是非情報をお寄せいただければと思います。

※ 戦場は太平洋に限らずアジアの広域にわたっているので歴史学界ではこの名称を使うようになりました。



6 和束町の歴史的建造物

岸 泰子

和束町には多くの歴史的建造物（寺社・民家・公共施設など）が残っています。町史では、それらを取り上げて、建築・建造物、あるいはそれらからなる空間の特徴を読み解くことで和束町の歴史を記していく予定です。現在、悉皆（一次）調査（町内にどこに・どのくらい歴史的建造物が残っているか）を行いつつ、そのなかから町史で詳しく取り上げる歴史的建造物を抽出し、それらを対象に詳細（二次）調査をはじめたところです。

調査中、歴史的建造物とはどれくらいの年月を経た建物を指すのですか、という質問をいただことがあります。お答えはとても難しいですが、昭和20年（1945年）までに建てられたものを歴史的建造物として調査対象とすることが多いようです。また、これまでではそのなかでも前近代（古代～江戸時代）の建築に注目が集まることが多かったのですが、最近では近代建築、例えば明治期から昭和前期に建てられた住宅や公共施設、寺社建築なども注目されるようになってきました。特に、和束町のように近代になって茶生産がより盛んになった地域では、明治期以降に建てられた住宅や付属屋、特に茶工場などは注目すべき建造物といえます。

加えて、和束町の歴史を考える上では、昭和28年（1953年）の水害が重要となってきます。水害被害から復興していくなかで、町民のみなさんが力をあわせて自分たちの住居や工場、町の施設などを再建しました。これらは戦後の建物ですので「歴史的建造物には入らない」と思われている方もおられるかもしれません、今回の町史ではこれらの災害復興の建物についてもできるだけ取り上げていきたいと思っています。

次に、寺社建築についてです。和束には、天満宮のほか、修驗で有名な金胎寺や、京都の禁裏の帰依を受けて再興された正法寺など、比較的大きな寺社があります。一方、町内には各村に寺院・神社が存在します。これらの寺社、そしてその建物は、町・村の歴史を知るための貴重な文化財です。信仰と人々の生活は切っても切れない関係にあります。多くの寺社が地域との関係のなかで境内・伽藍を維持してきました。今回の町史では、地域に残る寺社建築の調査を実施し、その特徴を分析する予定です。

また、今回の町史に関わる調査では、建物をつくる経緯、それに関わった人々、今まで大工の調査も行っています。それを知ることができる史料が、造営時に作成された文書や図面（指図）、そして建物を建てたときに掲げられる「棟札」という木札です。棟札には、建てた年月日、施主、関わった村の人々、大工（棟梁など）、職人（屋根葺など）の氏名を記すことになっています。ですので、私たちはそれを分析することで、和束で活躍した大工などを把握することができるというわけです。これまでの調査で確認できた造営文書や棟札の数は多くありませんが、実際にそれらをみていくと、江戸時代の和束では地

元の大工が活躍していたことがわかつてきました。特に、釜塚の大工が大工組（大工の集団）の代表をつとめるなど、中心的な役割を果たしていたようです。

なお、棟札は、村の構成、例えば庄屋は誰だったのか、神社を守っていたのはどの村だったのかなど、地域の社会・生活の様子を知るにも重要な史料です。棟札は民家の建設時にも作られることがあります。

いずれにせよ、みなさんのまわりに造営に関する文書、そして棟札はないでしょうか？あれば、編さん室に是非ご一報ください。



湯船 白山神社本殿



棟札（湯船 大師堂所蔵）

井上一稔

この報告では、多くの作例を調査させていただいた中から、姿を変えながら、新たな礼拝を受け、守り続けられてきた珍しい3体の仏像を紹介しましょう。なおこの改変は、造られた安置形式や像自体が何らかの不可抗力な災難で当初の状態を維持できなくなったものを、篤い信仰からそのままに放置せず守ってこられた形です。

初めに湯船・応源寺で現在本尊の阿弥陀三尊像の左脇侍として祀られ、平安時代11～12世紀の美作である観音菩薩立像（図1）を紹介します。観音の役割は、両手で蓮台を捧げて、往生者の魂を蓮台にすくい取って、阿弥陀如来とともに極楽に連れ帰るというものです。そのために腰を斜め後ろに引いて前かがみとなり、左膝を曲げて前に出す姿となっています。ただこの両手先や蓮台は造像当初からのものではなく、後の時代に補われています。また勢至菩薩像は、衣の皴の線がこの観音菩薩像と彫り口が異なり、観音菩薩像とセットで両脇侍にするために調子をあわせて彫られた可能性があります。そして阿弥陀如来像は江戸時代の作なので、この三尊はもともと一具の像ではありませんでした。ゆえに改めて観音菩薩像は単独でどのような性格の像であったかを考える必要があるのです。そこでこの動きのある姿に注目すると、宇治・平等院鳳凰堂に祀られている雲中供養菩薩像、あるいは阿弥陀如来の来迎に伴う聖衆の中の菩薩の1体であった可能性が浮かんできます。この問題は、修理された前の姿の調査などを継続して、今後も検討していくかなければなりません。

次に門前・大興寺の本尊十一面觀音立像（図2）を見てみましょう。面相や両肩のまるみ、スマートな下半身から平安時代12世紀の作であると考えられます。平安時代の貴族が好んだ優美な作品で、その完成度から京の熟練した仏師によって造られたことがうかがえます。先の応源寺観音像も同様です。本像における改変は、頭に

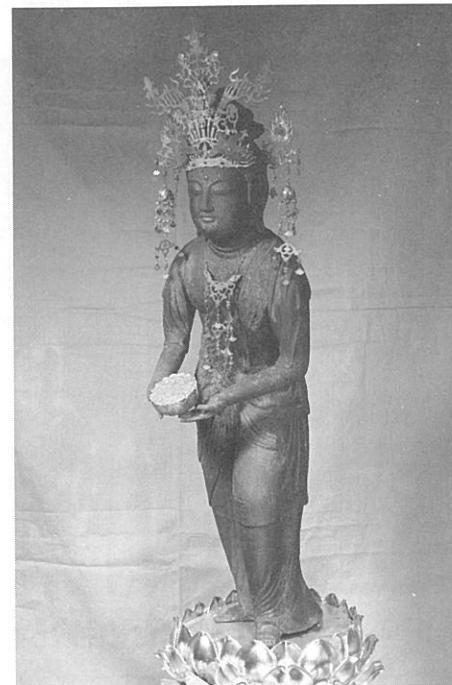


図1 観音菩薩立像（応源寺）



図2 十一面觀音立像（大興寺）

載せられている十一の小面全てが後に補われたものであることです。さらに髪の頂上部をよく調べると、本来小面を載せるように造られていないことが判明しました。ゆえに当初の姿は十一面を頭に戴いておらず、髪を結いあげたままの状態であったと考えられます。この像は、聖觀音菩薩像か他の菩薩像であったことになります。十一面觀音は疫病退散に功德がある仏として有名でしたので、その功德を求めて頭上に十一面が加えられたと考えられるかもしれません。

最後に正法寺の厨子入り毘沙門天三尊像（図3）をあげておきましょう。三尊のうち吉祥天像と善財童子像は江戸時代に補われたもので、毘沙門天像の造像期は鎌倉時代後期に遡りますので、もとは三尊構成ではなかったと思われます。この毘沙門天像は、兜をかぶり怒りの表情を見せ、左手を高く突き上げて宝珠をとる珍しい姿です。表面はやや黒ずんでいますが、彩色や切金文様が認められ、当初はきらびやかな美しい像であったことが分かります。さらによく調べさせていただくと、兜の頂に、おそらく小動物と思われる丸い背をして細い尻尾のある姿が彫られていました。頭部は欠失しているのですが、鼠を表したものではないかと考えられます。そこで頭頂に鼠を載せることで思いつくのが、薬師如来像の眷属である十二神将像のうちの子神像なので、これまで知られている子神像を調べてみました。そうしますと、本像と同じように左手を突き上げる姿の子神像として、鎌倉時代の早いころの奈良・室生寺像、室町時代の奈良・栄山寺像、桃山時代の京都・教王護国寺像がみつかりました。よって、本像は十二神将像の子神として造られましたが、他の像が破壊されあるいは失われた状態が生じ单独で伝わったものと思われます。単独となった本像を、鼠は毘沙門天像の眷属であるという信仰から、毘沙門天として祀りなおしたと考えられるのです。

以上の3例は、災難に会いながら、その後新たな命を与えられてよみがえった仏像です。ここに先人たちの叡智をみることができます。

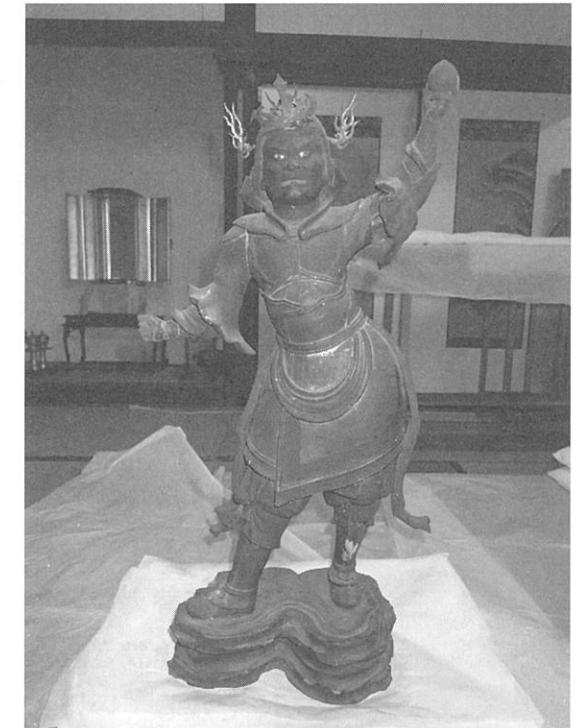


図3 毘沙門天像（正法寺）

8 焙炉と製茶場と茶撰り箱

藤井孝夫

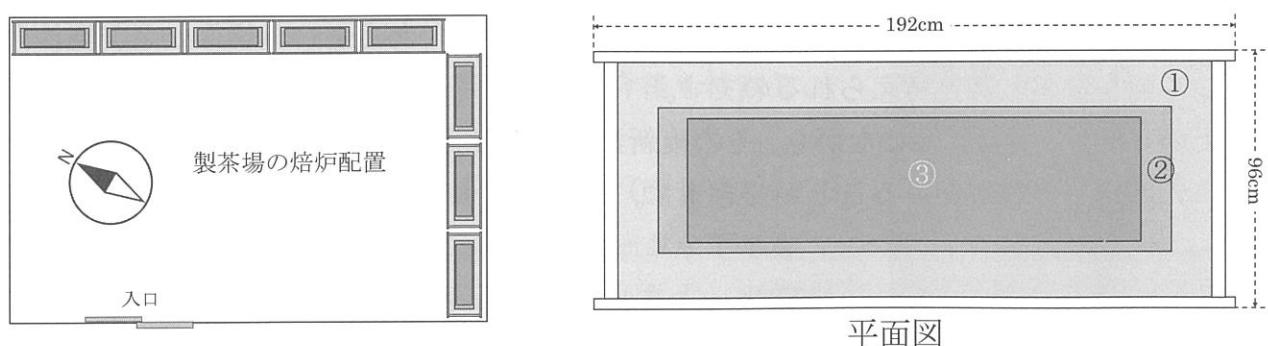
1. 茶の輸出と製造

江戸から明治にかけて、日本の緑茶は、海外でも人気を集めようになります。いち早く開港した横浜や長崎を拠点に輸出が始まり、遅れること10年、慶應3年（1867年）に神戸港も開港され、関西地方の茶産地からの輸出が急増します。大量に生産できる大型製茶機械が普及していくなかった明治時代の初期には、焙炉（底に炭火を入れて助炭〔焙炉の上に設置する和紙を貼り付けた木枠〕の上で茶葉を加熱しながら揉む器具）を使用した製茶が盛んに行われました。製造量を増やすには、製茶場にたくさんの焙炉を設置し、茶を手揉みする焙炉師を何人も雇用する必要がありました。焙炉による製茶は、和束でも昭和20年代前半まで行われていたようです。

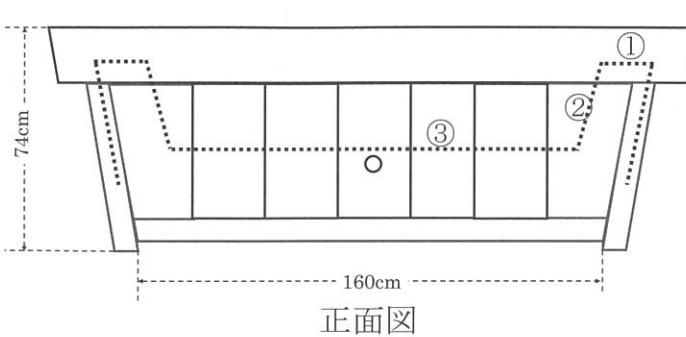
これまで和束町内には数件の焙炉の存在が確認されていたのですが、今回の調査では、複数の焙炉が設置された「焙炉場」を確認することができました。多くの茶生産者の皆様は、製茶の機械化が進展する中で、焙炉場の焙炉を撤去して機械を設置し、さらに機械の大型化で建屋の拡張や建て替えなどで現在に至っていると思われます。今回の調査地点では、別の場所に製茶工場を建設されたことから、建物を壊されず“奇跡的に”焙炉場が残されていました。よくぞ残していただいていると感謝、感激です。

2. 焙炉場と焙炉

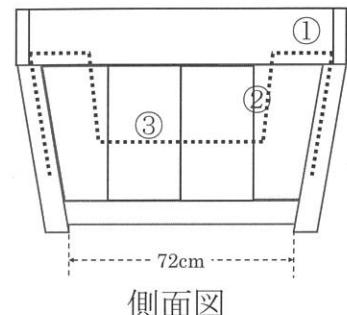
焙炉場の敷地面積は約80m²で、建屋の長尺方向に5基と短尺方向に3基が逆L字型に設置されています。また、長尺方向の壁は東北東に、短尺方向の壁は南南東に向き、焙炉の背後には大きな明かり取り（障子）が設置されています。



焙炉の基本構造は、木材で木枠を組み、枠内に赤～黄色土壌を充填し①、充填した土壌の中央部に長方形の凹み③が作られています。凹みの断面は鉛直ではないので、凹みの底部面積は上部より狭くなっています。平面図ではその差を②で示しています。



正面図



側面図

正面図と側面図の太破線は、土壌の充填状況を示しています。焙炉下部の土壌充填状況は不明なので、太破線を記載していません。

充填土壌の表面の色は、全般的には黄土色ですが、一部には加熱により酸化されて赤褐色や黒色に変色している部分も散見されました。

3. 茶撰り箱

焙炉場には、茶撰り箱も保管されていました。

茶撰り箱は、製造した荒茶を選り分けるための箱で、机の脚がわりにこの箱4個を用い、その上に戸板などの板を置きます。その上で選り分けを行い、選り分けたものを各茶撰り箱に投入します。茶撰り箱の底には「明治十九年戊戌新八月一日 新調」と墨書きされています。



まとめ

明治18年（1885年）には、普賢寺村（現京田辺市普賢寺）の伊東熊夫（後に京都府茶業組合聯合会議所〔現京都府茶業会議所〕の初代会頭）が山城製茶輸出会社を設立しました。米国が日本茶の粗製濫造を原因として、不正茶輸入禁止条例（明治15年）を制定する中で、山城茶（宇治茶を含む広義の茶）の良品質をアドバンテージに難局を乗り越えようとする伊東熊夫の問題意識でしょう。すでに煎茶の主産地のひとつであった和束郷においても、輸出をめざして良品の増産が奨励されたと考えられます。第4回国勧業博覧会が京都岡崎で開催され、和束4ヶ村から、「湯船製茶改良社」や「国富社」をはじめ、多くの生産者が製茶を出品したのは、約10年後の明治28年（1895年）でした。

9 和束町の古地図史料

上杉和央

和束町史編さんに伴う史料調査の中では、古文書だけでなく古地図についても各地に所蔵されていることが分かってきました。これまで編さん室にて調査された文書群の中で地図史料の数をカウントすると200点を超えていました。現在、こうした地図史料について、どういった種類の地図であるのかといった基礎的な検討を進めています。

現在、発見されている地図史料の多くは、作製年月日などが記載されていませんが、記載されている内容から見て近代以降に作られたものが大半を占めているということができます。ただ、江戸時代の年号を持つ史料も含まれており、江戸時代の和束町域を理解するのに寄与する地図もあることが分かってきました。

地図が作られる理由には、一定の領域を把握するため、小地域・地片を表示するため、土地に関する争論（裁判）のため、といったような点があります。残されている地図史料についていえば、村レベルや小字レベルの地域が表現される地図が多いように思います。これは村（区）の文書や家文書の一般的な特徴として認められるものです。また、争論に関わる地図も見受けられます。土地を巡る争論の場合、地図はきわめて重要な史料となりますので、争論が終結した後も大切に保管されてきた結果だと思われます。山に囲まれていて和束の場合、いわゆる山論に関する地図史料が多いのが特徴です。さらに、開拓や開発を願い出るために作られた地図といったものも見受けられます。こうした史料については、文字史料と一緒に検討することで豊かな情報を得ることができます。

一方で、いわゆる災害に関する地図はほとんど残されていないようです。昭和28年（1953年）の南山城水害での和束川の氾濫は記憶されている方も多いと思いますが、そうした水害は歴史時代を通じて何度もあったように思われます。そうした水害の被害が地図に認められることも多いのですが、現時点は近代以前の水害に明確に関わる地図は把握できていません。こうした地図史料をご存じでしたら、ぜひご一報いただきたいと思います。

なお、和束町を含んだ南山城地域の地図史料の中でもう1つ特徴的な点として、過去の状況を推定して描いた地図が一定数含まれている点も挙げておきたいと思います。たとえば中世の状況を推定して近世に描かれた地図といったようなものです。こうした地図に表現されている内容は過去の事実とは認められないもので、町史などで取り扱う際には慎重な姿勢が求められます。ただ、上記のように中世の状況を推定して近世に描かれた地図といった場合、中世の史料としてはまったく使えないことは言うまでもないですが、近世の社会や文化を示す史料、もしくは近世の中世イメージが表れた史料として検討することは可能です。町史の本編で扱うことではないと思われますが、見方によっては「おもしろい」地図史料もあるといった点を、書きとどめたく思います。

10 古地図史料紹介

町史編さん室

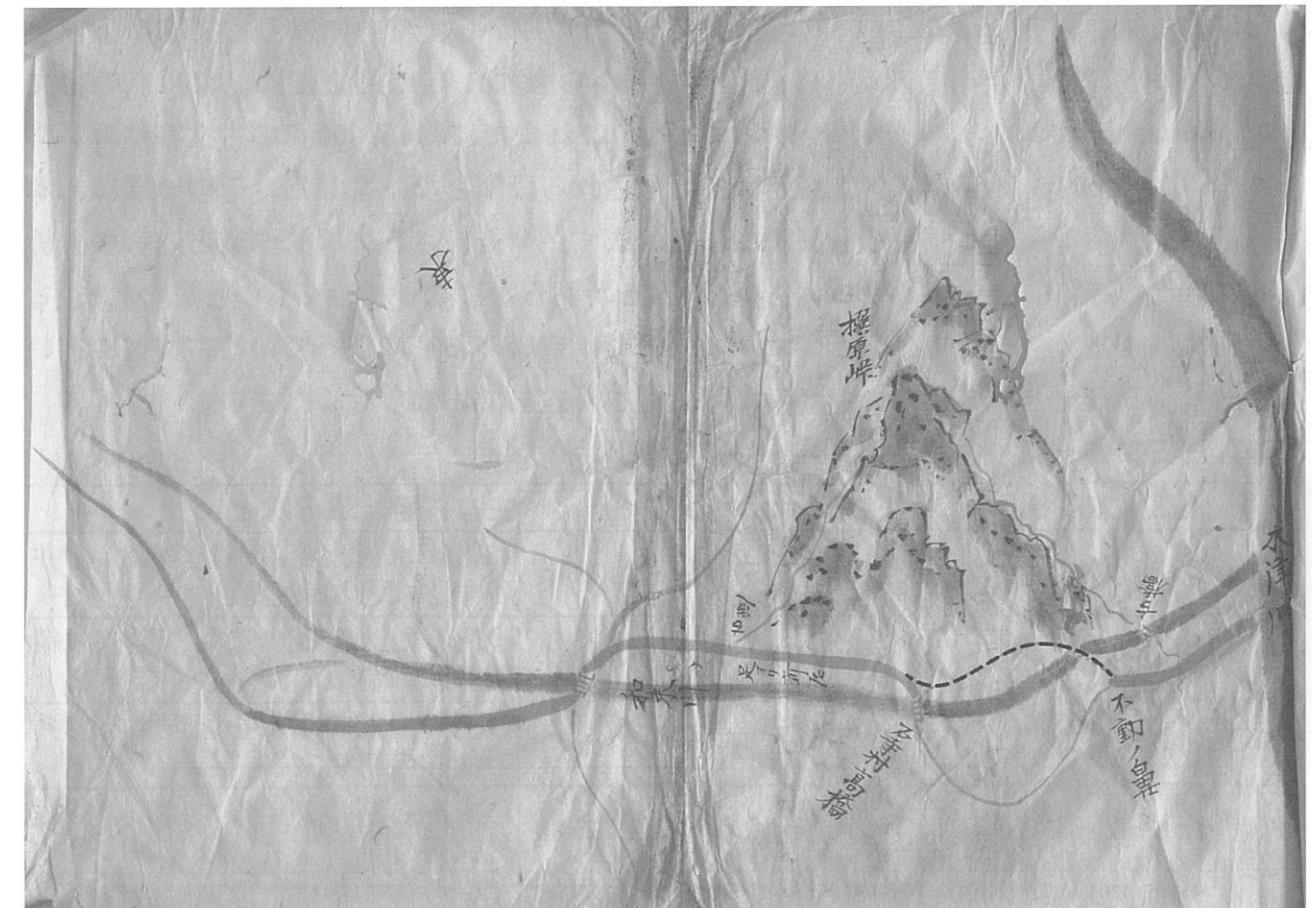


図1 明治11年（1878年）新道建設を請願した際の古地図（町史編さん室蔵）

町史編さん室では、主に古文書の翻刻・分析を行っていますが、同時に古地図の分析も行っています。その中から1点紹介したいと思います。

図1の古地図は明治11年（1878年）12月2日、原山村・門前村・園村・中村・別所村・釜塚村・南村・杣田村が連名で京都府知事に提出した請願書に添付されたものです。下島村古橋（現在の瓶原大橋の辺りにあった橋）から撰原峠を越える古道にかえて、奥畠村不動ノ鼻から石寺村高橋まで和束川に沿った新道を開設したいという内容のもので、点線部分が請願している新道です。点線部分の左側には横向きで「是ヨリ新道」と書かれており、太線部分が新道で、点線部分だけ新道が通っていないことがわかります。この新道開設には石寺村が賛成しなかったようで、請願書には石寺村を説得してほしいということが書かれています。

明治初期、古道が新道へと移りかわっていく様子が、この史料によって明らかとなりました。

1.1 調査した古文書一覧

和束町史編さん室

和束町史編さん室では、平成30年度（2018年）4月から、町内に残る古文書の整理を進めています。第1号掲載以後、令和2年2月から令和3年12月までに、3790点の古文書を整理し、目録作成と写真撮影を終えました。これまでに約15,000点の古文書整理が終わり、いよいよ町史執筆の基礎史料として活用される段階となりました。その一端は、本報告書の担当編集委員の原稿にも反映されています。今後、さらに解読作業と内容の分析が進められ、和束の人々の暮らしの移り変わりをが明らかになっていくものと思われます。

古文書調査は、引き続き実施しておりますので、皆様のお宅に眠っている古文書、古い書付や本、写真などがございましたら、町史編さん室までお知らせください。

調査した古文書一覧（令和2年2月～令和3年12月）

番号	地区	文書名	点数	時代	主な内容・備考など
27	原山	岡田家文書	1645	慶安5年～昭和29年	和束川水運、養治が芝争論、椿井谷争論など和束全般
28	中	森家文書	252	昭和4年～昭和32年	戦死した森茂氏の遺品、学校成績関係、入営後のはがき、書簡類
29	白栖	崩前井手管理者文書	17	寛政3年～令和2年	白栖の崩前の用水を管理する「井手仕」の講の文書
30	釜塚	辻家文書追加	505	文化9年～昭和26年	幕末から明治初年にかけての釜塚村文書
31	門前	杉本家文書	6	大正3年～昭和26年	小学校修業証書、農地解放資料、
32	湯船	前田家文書	6	昭和45年～平成15年	前田義延氏の日記
33	杣田	大西家文書	171	明治34年～昭和33年	卒業証書等、絵葉書類、大工関係など
34	杣田	稻垣家文書	707	安政3年～昭和34年	戦争中の杣田区常会資料、稻垣家の資料、教科書類
35	釜塚	辻家文書追加	317	文化2年～大正13年	教科書、図書類、近代書状など
36	釜塚	長仙寺文書	155	天保6年～大正7年	他寺院との合併や分離に関する文書
37	釜塚	田中家文書	9	天保6年～昭和2年	人形淨瑠璃床本、漢方薬調合書など
		合計点数	3790		

古文書以外の資料

精華	人物埴輪	2	古墳時代	大杉古墳出土人物埴輪、刀埴輪
撰原	須恵器片	1	古墳時代	坂尻古墳出土
白栖	玉淵叢話	3	明治35年（1902）	三木佐助の自伝

資料調査報告書 第2号

発行日	令和4年（2022）3月25日
編集	相楽東部広域連合教育委員会 生涯学習課和束町史編さん室
	TEL 0774-74-8952 FAX 0774-74-8953
発行	相楽東部広域連合教育委員会 〒619-1205 京都府相楽郡和束町大字中小字平田23-1
	TEL 0774-78-4335 FAX 0774-78-4338
印刷	ホームページ https://www.union.sourakutoubu.lg.jp 株式会社 春日

